

禅の友

Zen no Tomo

7

July 2024





ご本山だより
大本山永平寺【大布薩会】

だいふさつえ

大本山永平寺
福井県吉田郡
☎〇七七六・六三・三一〇二



毎年七月二日には大布薩会が厳修されます。布薩とは懺悔さんげをすること。つまり、お釈迦さまや道元禅師さまがお示しになられた教えにしたがって生活が出来ているか、自分を省み行いを改めていくのです。古来より定期的に布薩を行うことが仏教徒の習わしであり、インドでは新月と満月の日に行っていました。現在永平寺では毎月一日と晦日に行われており、これを略布薩りやくふさつと呼んでいます。そして年に一度、二時間以上の時間をかけて布薩を行うのが大布薩です。

夏にもなると、今年あらたに上山してきた修行僧たちも永平寺の生活にだいぶ慣れてきます。お互いの顔も名前も分かるようになり、それぞれの個性も出てきます。同期の仲間や先輩和尚、指導者とも親しくなり、お互いが励まし合い一層修行に励むこともあるでしょう。しかし実際は、気が緩み、日々

の生活が乱れることも増えてきます。

その様な時期に大布薩を行うことに大きな意義を感じます。この行持の中で、次のようなやり取りがあります。

請戒師じょうかいし「汝等今人身より仏身ぶつしんに至るも、能く邪を捨て正ただに帰し、菩提心ぼだいしんを發し、悪を断じ善を修行し、菩薩戒ぼさつがいをな持ち、菩薩の行を行ぜんや、否や」
戒弟がいだい「能く行ぜん」

請戒師というお役の指導者より「あなたは今から自分自身が仏の身になるまで、悪をなさず善を行い、十六の戒を持ち、菩薩として生きていけるか、いけないか、どちらだ」と問われます。それに対して修行僧たちは「しっかりと戒かいを持ち、菩薩として生きていきます」と返答するのです。

実は、出家をして僧侶になる際に行う得度という儀式でも似たようなやり取りがあるのです。まさに、初心忘るべからずです。



ご本山だより
大本山總持寺【盂蘭盆会とみ霊まつり】

大本山總持寺
神奈川県横浜市
☎〇四五・五八一・六〇二二



瞬く間に半年が終わり總持寺では盂蘭盆会の時節となりました。

一月の能登半島大震災は未だライフラインが完全に復旧されず、仮設住宅等で不自由な生活を強いられている方もおられる中、この震災で亡くなられた方が二四五人となり、このお盆で新盆（しんぼん、あらぼん）と言うところもある）を迎えることとなります（能登地方は旧盆）。

「新盆の切子の白さともしけり」（安住敦一俳人・随筆家）があります。

切子とは細い角棒を箱型に組み立て側面に半紙を貼り、薄板を屋根にした灯笼型のものです。側面の半紙に供養する戒名、法名を書き入れ墓前に供えて中にローソクを立て、迎え火、送り火とします。

新盆を迎え、切子に戒名・法名を書いて、日の落ちた夕方に燈火をつける
と真つ白な半紙にその文字が浮き上がってくる様子を詠んだでしょう。

總持寺では引き続き感染予防に努める傍ら、参詣者を募り、七月三日から九日まで盂蘭盆施食（せじき）法要が行われます。また本山墓地においての「お盆の墓経」も引き続き行うこととなります。

更に大駐車場を会場に「み霊祭り」も予定しております。この行事は今年で七十七年目を迎えますが、もともと横浜大空襲と鶴見駅鉄道事故の犠牲者を慰霊するために始められたものです。近年では東日本大震災や一月の能登半島大震災、国内外の様々な事故、自然災害による被災者への供養も込められて行われています。

選・坊城俊樹

鳥雲に入るはしづけき祈りとも

北海道 大野 節子

評 これは格調のある句だ。「鳥雲に」は鳥たちが

越冬をして北へ帰ることをいう季題。もしかしたらこれらの仲間では帰れなくなった鳥も居ただろう。それへの鎮魂の心とも。これから無事に帰れるかを祈りつつ羽搏いて行くものたちへの哀愁の句とも。

抜じ伏せて磨く犬の歯みどりの日

長野県 森山 昌子

評 これはまた傑作。「みどりの日」は自然に親しむためにその恩恵に感謝する季題。しかしこの句はそんなことを言っている閑はない。今日こそは愛犬を抜じ伏せて歯を磨いてやろうと。こんな穏やかな日の下で格闘する場面が

まことに愉快。

◆ 帰り道花見の中を通りけり

長崎県 崎田 定雄

◆ 山茶莢さんしやうの枝晴天を刺す如し

兵庫県 待元 明子

◆ りら冷えや自宅待機のひとりつ子

千葉県 甲斐 勇

◆ あせび咲く方の鈴の音きこえさう

山口県 御江 恭子

◆ 消しゴムの角も新らし四月かな

東京都 鈴木 英治

◆ 惚ぼけたふりの親で安泰四月馬鹿

宮城県 金升 富美子

◆ あんなことこんなことあり花疲れ

兵庫県 内藤 昭子

◆ 学ランの葬儀うけつけ花一朶

静岡県 末光 愛正

◆ 天守へと脱兎のごとく遠足児

島根県 藤江 堯

◆ 禍福とは人の世のこと花万朶

岐阜県 大下 雅子

選者吟

鳥帰る日も繋がれし氷川丸

俊樹

作句小見

これも鳥たちの越冬をして帰る句。「氷川丸」は横浜港に接岸されている昔は豪華客船として有名だった船。今は引退して観光用に岸壁に繋がれて居る。その上を鳥たちが帰って行く。はたしてそれを見ている船は何を思っているのだろう。

選・長澤ちづ

鶉色は鶉の裏羽の薄い紅母の袷の八掛の色

秋田県 小松紀子

評

「八掛」は袷の着物の裏の裾回しのこと、裾捌ぎでちらと見えたりするので、表地に似合うきれいな色が使われる。この一首では「トキの裏羽の色」と詠い、着物を讃えながら、若かりしころの母の姿を立ち上がらせている。

馬屋に栖む猫の親仔を飼い始め「三毛、玖路、十楽」と病院で書く

岩手県 千葉喜恵

評

「栖む」には飼う気はなかったが、居付いてしまった様子が出ている。付けた名前が何と言ってもユニークでドラマを感じさせる。昔、飼っていた愛馬の名前だろうか。

◆ 老いの身のまた来む春は知らねども有りて嬉しく無くてまた佳し

ロンドン パロー典子

◆ 堀川のゆるり流るる水の中うろくず二匹の動く影あり

島根県 宮廻恒雄

◆ 買ひ替へしテレビの明るき画面には埃まひ上げガザをゆく戦車

茨城県 田口昭子

◆ 薪引き損ねほんのり生まれた焦げ飯が旨いと母はよそつてくれぬ

三重県 西村廣視

◆ 物忘れしても忘れぬものがある逝きし人の法名寿限無のごとく

宮城県 阿部澄江

◆ ふるさとの海見える墓に妹の分骨納め春風寒し

奈良県 佐藤和代

◆ 春の朝ゆつくり深く呼吸する大地の息のリズムに合わせ

埼玉県 新井巳喜雄

◆ 苦土石灰畑に撒いて五月待つ四月は雨の多い月なり

静岡県 杉原民子

◆ 朽ちゆるる空き家の屋根のアンテナにスタッカートで鳴く四十雀

埼玉県 白藤巳玲

◆ たよりなき一人分なる米を研ぐままごとするよなわれの右の手

埼玉県 小林茂之

選者誌

わたくしの塗った塗り絵と絵の中のリンドウ携え

老女訪ね来

ちづ

作歌小見

ロンドンから投稿してくださいさるパロー典子さんの一首の達観なさった境地に驚きました。結句は普通「あるだろうか」と嘆じて終わるところです。白藤さんの上句と下句の対比の鮮やかさ。新井さんの大らかな詠う呼吸、素敵です。